

# 平成二十年度 小論文試験

④

「自然」という言葉の反対語は「人為」「人工」である。人手が加わったものは純正の自然とはいわれない。人は自らを必然的に自然と対決すべき存在であると認めている。それほどまで、人は自分たちの行為に自信をもっているのである。言葉の定義として「自然」を理解することはさして難しいことではない。しかし、実際には、純正の自然とは何かを見ることは大変に難しいことである。人為・人工とは何かを突き詰めることが難しいからである。

ヒトはもとも自然界の申し子として進化を遂げてきた。ヒトは人になるまで動物の一種として、特異性は格別大きなものではなかった。人が人為・人工をもたらす文明を構築するまで、ヒトの行動は、ほかの動物の間にみられる特性、たとえばライオンやトラに特有な行動とくらべて、いちじるしく特異な差をもつものではなかった。ところが、ヒトが固有の文明をもち、独特の技術によって④行動を質的に飛躍的に高めるようになってからは、①ホウカツ的に動物の行動としてまとめられるものからははずれて、人為・人工という特別の言葉を用意する必要があるが生じてきた。ライオンやトラの行動は、決して、「獅子為」や「虎工」ということはない。

とすれば、人の生は生物一般の生の階梯からある⑤閾値を超えて抜け出したのだろうか。人為・人工の始まりがいつだったか、ヒト化を専門に研究している人たちがさえ、定めるのが難しいようである。直立二足歩行を始めたサル目の動物が、やがてヒトに進化する。そのヒトが行う行為が人為・人工である。

新石器時代に入って、狩猟採集の生活から農耕牧畜の生活に軸足を変えたヒトは、自然と対立する存在となり、自然と対立する側面を創出して、自然に対してはなほだしい変革を強いてきた。どれだけ徹底的であっても、狩猟採集という行動は生物界の食物連鎖の一環である。ところが、農耕牧畜のためには、農地をつくり、牧場をつくる。地球表面は、はじめはわずかな面積ではあったが、決定的な変化を強いられた。人の行為、いいかえれば人為が、地球表面、そこにある自然に、対立的な構図を描き出した第一歩である。さらに、自然に生きていた生物のうちのあるものを、人為の管理下におくことを始めた。飼育②サイバイ動植物をつかったのである。

人為・人工の始まりがいつで、どのような③ヨウタイであったのか、歴史の議論をここで行う意図は私にはない。何年何月に始まったものと断定できるのではなくて、少しずつ積み重ねられた変化が、いつかヒト化と呼べるほどの量にまで④チクセキしたのちにない。

もともとはヒトも自然界を構成する生物多様性の一角を担っていた種であったのだが、自然界と対立する人為・人工を操る存在となつて以降は、自然から自立し、自然と対立する存在となつていった。そのような存在になつても、人は長い間、対立関係をむき出しにすることなく、自然と調和ある共存に成功して、営為の及ぼす範囲を局部的に封じ込めてきた。しかし、いまはグローバリゼーションの時代で、人の営為も地球規模で進行する。対立を、局部的に封じ込めることから、地球規模に拡大することに転じた。対立はそのまま⑤エイリな牙をむき出すことになつたのである。グローバリゼーションが悪いのではない。何を地球規模に拡大すべきか、何をすべきでないか、拡大の影響を予測し、営為に歯止めをかけるべきものはとどめなければならぬのである。だからこそ、人と自然の共存をめざすという表現が必要とされるようになった。自然と共存という表現が可能になつたことからして、人が自然と離反した存在になり、自然との共存の必要を痛感するようになったことの表れである。

岩槻邦男 『生命系』(抄)

問一 本文の論旨を示すため、④

に入れるべき表題を10字以内で書きなさい。

問二 本文中の①②⑤の語句を漢字で書きなさい。

問三 傍線部⑥の指す内容としてもっとも適切なものを選び、その記号を書きなさい。

- ア 直立二足歩行を始めた
- イ 固有の文明を構築した
- ウ 農耕牧畜を始めた
- エ 徹底的な狩猟採集を行った
- オ 自然との共存をめざした

問四 ④の閾値の読みを書きなさい。また、その意味を20字以内で書きなさい。

問五 人と自然との関わりについて著者の考えを350字以上400字以内でまとめなさい

